メールニュース　2025年　7月27日付　NO.25208

対馬丸記念館で戦後80年の企画展
疎開船「対馬丸」の悲惨な経験を語り継ぐ

対馬丸記念館

太平洋戦争最中の昭和19年7月、サイパン島の日本軍が全滅し、いよいよ沖縄が戦場となる危険が大きいと判断した政府は沖縄県や奄美大島・徳之島のお年寄り・子ども・女性を島外へ疎開させるよう指示を出しました。

政府の指示に従い、沖縄県は「沖縄県学童集団疎開準備要綱」（沖縄県の子どもたちを県外へ集団で疎開させる準備の決まり事）により学校単位で疎開事務をすすめます。多数の兵士が沖縄に移駐し大量の食糧が必要になり、民間人を県外へ移動させることが急務だったのです。

当時、沖縄・鹿児島間の海域にはアメリカ軍の潜水艦が出没し、日本の船が攻撃を受け沈められていたため、親たちはとても心配しました。

しかし、一方で沖縄にとどまればアメリカ軍の攻撃を受ける危険もあると考えました。疎開をさせる当日、那覇港に待っていたのは、対馬丸をはじめとする貨物船3隻と2隻の護衛艦で、親たちはこれら5隻からなる「ナモ103船団」を不安な気持ちで見送ったのです。

対馬丸は、民間徴用船で1944年（昭和19年）8月21日、疎開船として那覇市内の学童約800人、一般疎開者、船員など合計1788人を乗せて那覇港を他の2隻の疎開船と共に護衛艦2隻に護衛され長崎に向け出港しました。

翌22日の夜、鹿児島県悪石島付近で米国潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により沈没。およそ1500人の尊い命が犠牲となり、生き残った約280人も命の危険にさらされました。「対馬丸記念館」は、この悲惨な体験を通じて、「戦争からは何も生まれない」と伝え続けています。

戦後80年企画展には、全日本海員組合関西地方支部内の「戦没した船と海員の資料館」も協力団体として参画し、6月21日には全日本海員組合の元中央執行委員の平山誠一さんが「戦没船を記録すること」を講演した。

戦没した船と海員の資料館

全日本海員組合が、二度と海を戦場にしてはいけない、このような悲劇を繰り返してはならないという思いから「海員不戦の誓い」のもと、海の平和を希求する運動を展開し、2000年（平成12年）8月、兵庫県神戸市の全日本海員組合関西地方支部内に「戦没した船と海員の資料館」を開設しました。今なお海に眠る船員の先輩諸氏の追悼とともに、過去の悲劇を風化させないよう平和の尊さを後世に伝えています。

「海員だより」